

## 驚きの多目的イベント空間ができていた

全国山村振興連盟事務局長 實重重実

かつての知合いが定年退職後に地域活性化を手がける民宿を営んでおられると聞いて、地域活性化の現場での裏表の話を聞きたいと思い、愛知県西尾市に出かけた。

行って見てびっくり。それは民宿どころか、宿泊もできる多目的交流スペースであり、知人が営んでいたのは、宿泊もできる「イベント企画会社」なのだった。

どういうことかということ、まず施設の面では以前知人の両親が住んでいた実家を改装した2棟、新設したゲストハウスが1棟、さらには知人の住居と物置の2棟という合計5棟もの建物が、広い庭を囲んで立っている。その建物を利用して、外国人を含む観光客を迎えるゲストハウス、音楽コンサート、英語塾、ピアノの練習、カフェ・レストランなど、そこに集う人々が「やりたいことをやる」ためのスペースができていたのだ。

やがて人々の集う場所から新しいネットワークが生まれて、相互作用を起こしていく。そうした地域活性化の姿が生まれる場所なのだった。

知人というのは、元・日本農業新聞編集局長の永井考介さん。私は農水省時代に長くお付き合いさせていただいた、誠意のある記者の方だった。その永井さんが若いときに札幌支局に赴任した頃から、地域活性化の当事者になりたいと考えて、長い間暖めてきた構想だった。その構想について、退職後に思い切り私財を投じて実現させたものだ。施設の名称は「きーずハウス」と言い、開設されたのは2017年なので、もう6年以上になる。

きーずハウスを中心として、コロナの厳しい期間を耐え抜いて、様々な交流の輪が広がっている。私が訪れた日も、音楽家の方々、市民活動家、子ども食堂の関係者など多様な人が集っていた。

その後はドイツ人の方々が滞在される予定とのことだった。ネットを見て外国から日本に来て、アドベンチャー・トラベル（体験旅行）をする人々も多いのだという。

西尾市には海があり、海に迫る山や川があり、江戸時代に塩田で栄えた歴史があり、有名な吉良上野介の菩提寺や墓がある。市内に200か所以上のお寺があり、お寺の数では日本有数なのだという。

こうした多彩な地域の魅力について、永井さんは「地域には、自然資源、文化資源、人的資源という3種類の資源がある」と表現する。きーずハウスは、これらをマッチングして地域の魅力を発信し、関係人口が増加するようになることを目指している。「地域の人々にとっては交流の場となり、地域外の人々にとっては繰り返し訪問できるよう

な場所を作りたい。」という永井さんの記者時代からの目標は、すでに実現していると言えるだろう。

永井さんは施設内の交流室を使って自ら地域の歴史を講義し続けており、地元紙にも紹介されて成功してきた。また、現在力を入れて取り組んでいるイベントは、お寺の本堂を利用した春秋2回の音楽コンサートである。これは有料の音楽フェスであり、クラシックを中心としたプロの音楽家が出演するという形を取る。

きーずハウスの多目的宿泊・交流施設については、私は訪問する前は、永井さんが民宿かペンションのオーナーのような形で地域活動に参加されているのかと思っていた。しかしそうではなくて、実際はむしろ地域活性化の中核的な拠点になっているのだった。珍しいスタイルの施設なので「民間公民館」と書いた新聞もあったが、何とも形容しがたいユニークな施設だ。

永井さんは「施設やイベントは自分の創作活動のようなもの。夢は、さらに改良して広げていくことだ。」と言う。

きーずハウスを中心に、そこに集う人々の間で自然発生的に連携が生まれていくことも多い。永井さんは、あまり前面に立たずにそれを見守っている。

しかし「きーずハウスだけでやるには限界があり、自分もきーずハウスで手いっぱいなので忙しすぎる。」とも言う。本来はこうした永井さんのような活動をするたくさんの主体・団体を結び目の一つ一つとして、ネットワークになるようにつないでいくことが必要なのだろう。その場を提供したり活動を支援したりすることに、市町村行政の果たせる役割があるような気がする。

きーずハウスには、たくさんのスタッフの方々が、レストランのシェフ、ゲストハウスの管理、事務・経理などの形で勤務していて、これはきーずハウスからの委託契約となっている。女性を中心とするスタッフの方々からは、「自分のできる時間に自由に働くことができる。会社勤めのときに感じていたもやもやがなくなった。」といった声が聞かれた。赤ちゃんを連れてきても良いし、スタッフの子供たちが来客の子供たちと遊んだりすることもできる。まさに「地域の人々の交流の場」なのだ。

私が帰る間際になって、庭で採れた青い花「バタフライハーブ」で作ったハーブティーをいただいた。透き通った紺碧色のお茶であり、ノヴァリスの「青い花」を連想させる幻想的な色彩をしていた。そこにレモン液を何滴か垂らすと、紺碧色が一瞬で透明な淡いすみれ色に変わった。私もハーブティーは好物だが、これほど色の美しいハーブティーは初めていただいた。その色彩は、永井さんが今もまだ追いつけている見果てぬ夢を象徴しているようにも感じられた。

「きーずハウス」 電話:0563-32-0657 E-mail:keys2020@katch.ne.jp